

阿蘇山の神話

蹴って地形を形成

阿蘇山には十二柱の神々が祀られています。その十二柱のうち、特に重要な三柱は、健甕龍命、その妻阿蘇都比咩命、そして彼らの孫の彦御子神です。

日本の神々は良い面と悪い面を併せ持ちます：彼らは自然の恵みと自然災害の両方の原因となります。阿蘇山の神々の場合、その良い面は阿蘇カルデラの豊かな稲作の恵みを支える形で表れ、悪い面は破壊的な火山の噴火として表れました。

遠い昔、阿蘇のカルデラには湖がありました。このカルデラに人が住み農作ができるようになったのは、カルデラの外壁の一部が崩れ、水がすべて流れ出した後のことでした。地元の神話では、この変容は健甕龍命によるものとされています。最初、カルデラ東側の中間あたりにある二重峠でカルデラ壁を蹴破って穴を開けようとして失敗した健甕龍命は、そこから少し南に移動し、立野で再びカルデラ壁に強烈な蹴りを入れました。ここではうまく穴を開けることができ、内部の水が流れ出しました。(立野は現在の白川と黒川が合流してカルデラから流れ出ている地点です。)

立野という地名は「立てない」という意味で、健甕龍命が二度目の蹴りの後、バランスを崩して後方へ倒れたことに由来するとされています。阿蘇の湖の水を抜いて人々がカルデラの内部で生活し農耕できるようにしたことから、健甕龍命は「阿蘇の父」とみなされており、この火山にまつわる十二柱の神々の中で最も重要な神とされています。